

杭州紀行

早川蓉堂

南末の榮華は、春風の花を散らすと見る夢のごとく胸のさはぐものなれば、その臨安のまぼろしの樂しびの跡をなむ、唐土の南のかた杭州に申はぼとて、畫師なる彭綦山ほうきざんとともに、七つ緒の琴たづさへて、燕京に霜風のいたく吹き荒るるに朝戸出せしは、ひつじ年の師走の初めなり。天路をゆく旅なれば夕日の傾くころ、杭州の街の東に至るに、ところの人なる孫大聖、わざと車を出して迎へきたるこそ嬉しけれ。

路を少し行くに、大いなる橋にさしかかりぬ。問ふに、中秋の潮に名にしおふ錢塘江とぞ。入日はるかに波を照らし、水煙渺茫と起こりて、いとも雄雄しき景色なり。漢詩をなむ、ひとつ詠みたる。

「渡錢塘江」

錢塘江を渡る

忽變車窗景

忽ちに變ず、車窗の景、

錢塘渡大橋

錢塘、大橋を渡る。

煙波斜日遠

煙波、斜日遠く、

歸鳥影寥寥

歸鳥、影寥寥たり。

杭州の街に入れば、煬帝が運河の柳、いとも青青しく風になびくさま、かの吐く息も凍るばかりの北國とは、うちかはりて、陽春三月、艷陽の天にまがふ。綠酒紅燈の巷を過ぎ、日も入り果てたるに、名もしるき西湖、なほ現はれもせず、心も急ぐに、長き大路の行きあたりて左に廻る時、「見よ、波の光あり」といふ聲に顧みれば、黒き影となれる木の間より、激れんえんたる波、白銀のかかやきを伴ひて見えつ隠れつ、やがて木木も盡くれば、靜かなる湖を一望のうちに收めたり。孫大聖、「はや西湖の見えたるぞ。詩こそあらまほしけれ」と促せば、とりあへず、

「西湖偶題」

西湖偶題

岳王墳草合

岳王墳の草合し、

靈隱寺門開

靈隱寺の門開く。

路盡高樓下

路は盡く、高樓の下、

西湖入眼來

西湖、眼に入りて來る。

車とめて樓閣に登れば、やがて知れる人たち多く集ひて宴して、旨酒佳肴つらねたるにも、この朝採りけるといふ田螺の味こそ、いとめでたし。酔醒ましとて、みな手を携へて西湖に遊び、孤山より湖に出で、白樂天が築きける白堤をすすみて斷橋にむかへば、一片の寒月、雲もなき中空はるかにさし昇り、波間はるかに照りわたりたる景色、まことに面白し。

「冬夜遊西湖歌」

冬夜 西湖に遊ぶの歌

冬宵飲酒過三爵

冬宵酒を飲みて三爵を過ぎ、

耳熱臨風不畏寒

耳熱し、風に臨んで寒きを畏れず。

柳塘千古西湖月

柳塘千古、西湖の月、

白傅坡仙皆仰觀

白傅・坡仙、みな仰ぎ觀る。

萬頃澄波 壁影 萬頃の澄波、壁影を め、
阿閣紅燈映石欄 阿閣の紅燈、石欄に映ず。
笑語忽到孤山路 笑語、忽ちに到る孤山路、
豫章古樹千根蟠 豫章の古樹、千根蟠る。
又到保俶塔前路 また到る、保俶塔前の路、
吟詩醉步已蹒跚 詩を吟じ、酔歩すでに蹒跚たり。
殘荷含風聾索索 殘荷風を含みて聾索索、
逍遙斷橋夜欲闌 斷橋を逍遙し、夜闌はならんと欲す。

となむ作りて、風に臨みて誦じたるに、人ども興じあひて掌をうちたたく。
明くる朝、宿は西湖にほど近ければ、ひとり吟杖をひきて岸のあたりを徘徊せるに、

「晨遊西湖」 晨に西湖に遊ぶ
十里長堤路 十里、長堤の路、
殘荷帶露珠 殘荷、露珠を帶ぶ。
朝光入湖面 朝光、湖面に入り、
煙景更模糊 煙景、更に模糊たり。

と五絶を得たり。晝まへより彭山、孫大聖とともに靈隱寺に詣づ。かたはらの飛來峰こそ、天竺の鷲峰より飛
び來たりけるがゆゑにかく名づくごとぞ。古藤奇草しげりあひ、幽洞神窟あまたにして、佛道修行の靈境なり。

「題飛來峰」 飛來峰に題す
佛說法華地 佛の法華を説きたまふの地、
白毫光彩柔 白毫、光彩柔らかなり。
飛來是何日 飛來、これ何れの日ぞ、
風雨已千秋 風雨、すでに千秋なり
苔佛臨風默 苔佛、風に臨みて黙し、
石泉噴雪流 石泉、雪を噴いて流る。
古藤遮險路 古藤、險路を遮り、
不許俗人遊 許さず、俗人の遊ぶを。

と詠む。この日はすこし頭いたく、物憂ければ、かへりて夜は何事もなし。

あくる朝は雨なり。杭州をたちて四明にむかひ、富春を過ぎしころには、細き雨なむ窗にはらめき落ち、いと興
なかりしが、彭綦山「あたりの川や山のかたちなど見よかし。富春江なるぞ。いとど心つくしや。元の黃公望が
『富春山居圖』を描きしは、このところなりける。」といへば、

冷雨遙望富春江

冷雨遙かに望む、富春江、

浮動煙景真無雙

浮動の煙景、真に無雙。

遠近山峰掃青黛

遠近の山峰、青黛を掃ひ、

正是黃公畫室窗

正にこれ黃公の畫室の窗。

憶昔大癡展 紙

憶ふ昔、大癡 紙を展へ、

縱横揮筆幻山水

縱横に筆を揮ひて山水を幻す。

新磨佳墨幽蘭香

新たに磨せる佳墨は、幽蘭の香、

數尺畫卷縮千里

數尺の畫卷、千里を縮む。

と詠みて、いにしへの人を思ひしのぶ。夕べに龍門鎮になむ宿を借りしが、羊を烹して肥牛を宰し、玉盃を舉げて美酒を酌み、歌ひののしる。

あくる日、明州の阿育王寺にいたりしは、黃昏のころなり。名のいたく天竺めきたるは、阿育王が舍利塔なむ、納め奉るがゆゑなりける。丹塗りの垣に、背高き唐竹を植ゑて四方に巡らせ、九重の塔、氣高くも聳えたるは、雪舟和尚の墨繪のうちに描けるに異ならず。本朝との所縁なむ、いとも淺からずして、鑿眞和上の居らせたまひけるは『東征傳』に見ゆなる。燈籠大臣、己が家の行くすゑ覺束なければ、異国に善根を積まむとて、はるかに使して黃金渡し、時の方丈、佛照徳光禪師に見えさせて、後世のとぶらひを頼みけること、『平曲』つぶさに述べたり。孫大聖の日ごろ親しき僧あれば、今宵の宿をなむ、この蘭若の軒下に定めたるは、いづれの世にか契りおきし縁なるらむ。導きたまひて僧房に住まはせ、ゆふべの座禪をへしち、御厨になむ伴ひて、衆僧とともに湯通せる麵をなむ取らしめたまふ。ただ屋根のみありて壁なく、すこし肌寒き造りなれども、煤けたる柱いとも古りて、椎茸を求めに來たれる典座の今にも出で來たらむ心地して、なつかしう、をかしげなり。

方丈に入りて、茶菓など出だしくるれば、携へし琴のこと持ちよせ、玉徽をはらひ、氷絃ととのへ果てて、彭萆山はじめに「白雪」の曲をつま弾くに、凜然清潔にして、虚空澄みわたるばかりなり。取りて渡しくるれば、前のあまりに冷ややかなればとて溫和綺麗なる「春夜宴桃李園序」をなむ奏ではべる。つひで郭楚望が「瀟湘水雲」なれば徐雪江が「澤畔吟」にて合はせはべり、淡白なる「漁樵問答」には奥古なる「文王操」、いざ夜も更けぬればとて終はりに伯牙が「高山」を弾けば、いみじく興ありと胸うちふるふばかりにて、我が蜀派の秘曲「流水」を對としてかき鳴らしはべるに、指のした、絲のうへ、あたかも一滴の水やうやう集まりて流れくんだり、やがて三峡流泉となりて衝波激突し、泡沫亂れ起こり、東海にむかひて一瀉萬里の勢を見すること聲にあらはる。夜話しも果つれば、僧房に歸るみちすがら、しりへの育王嶺と覺しく、風に揺るる竹の葉づれのさやさやと聞こゆれば、

「宿阿育王寺」

阿育王寺に宿す

星空靈塔直

星空、靈塔直く、

寶殿一燈深

寶殿、一燈深し。

風竹育王嶺

風竹、育王嶺、

寒音冬夜心

寒音、冬夜の心。

と詠む。風の響き心に沁みて、いとも奥ゆかし。鎌倉右大臣は前世にこの寺の長老なりけると言ふは、人傑地靈といふも思ひやられてなむ、さもありぬべく。

朝にたち出でなむとするに、佛堂に優婆夷の専女ありて「いづこより參らせたまふ」と問へば、「大和の國より」と答へはべるに、掌合はせて「阿弥陀佛、あないみじや、遙かに詣でさせたまふものよ」と言ひ、また「さても我が寺に、優れてものものしきは、御佛の頭の舍利になむ、ひとたび拝し奉りぬれば、三世の罪業みな消ゆべかめる。あなたふと」と勧めたり。孫大聖、案内知りたれば、彭山もつれて回廊をめぐりゆき、舍利殿のしりへの藏經樓に上りぬ。唐木の扉を叩けば、僧ひとり出で來たりて、沈の煙くゆりたる寶壇のまへに招く。青黒き色して、黄金のはだらなる塔、丈一尺ばかりなるこそ、いみじう貴きさまにて、ゆゑゆゑしく、天竺の昔こそ思ひやられる。一人づつ跪きて拝みまつるに、透かし彫りせる間より、内側のうへに、米粒よりはやや大きな舍利のえも言われぬばかりに艶めきて、露けきばかりに見ゆ。寺を出でしうち、彭綦山「昔より傳へて、かの舍利の眼になむ見えねば、遠からず儂くなるとぞ。さて、いかなる色なりしや。まろは赤なりき」と問へば、「白かりき」といらへ侍るに、孫大聖も「同じきなり」といふ。人みな來しかたの路たがへば、結びし縁にしたがひて色も光も異なるにやあらむ。承陽大師が錫を飛ばしたまひし天童山は、さまで遠からず。松柏亭亭として連なり、鳥鳴いて更に幽なる寂寞の趣など比べ苦しや。法堂に詣つれば、孫大聖が知れる淨明法師むかへて、大師および雪舟が頂相、明清の碑などをめぐり歩く。羅漢堂を出でしに、嵐の颯と顔にしみて雨粒ふりかかり、見わたす山の、さきに増していとも青かりければ、

「訪天童寺」

天童寺を訪ふ

飛錫遺蹤何處尋

飛錫の遺蹤、何れの處にか尋ねん、

苔碑寶塔靜空林

苔碑、寶塔、空林、靜かなり。

兩山皆現青蓮色

兩山、みな現ず青蓮の色、

千載幽光沁眼深

千載の幽光、眼に沁みて深し。

と詠みて贈りはべる。かねて方丈の誠信禪師は善知識なりと聞きけるを、今日はおはしまさねば、口をしきことにこそ。

日の暮れぬまにとて、車を馳せて杭州の街に歸りきたれば、友たち別れの宴をなむ開く。小雨そぼ降る恣邊に坐りて、琴など弾く音のうちにも、ただしめやかなる心地して、酔ひたる心もつねには似ず、いとあはれなるを、

「冬夜六友小聚」

冬夜、六友と小聚す

西湖夜雨紅燈濕

西湖の夜雨、紅燈、濕ひ、

南宋繁華直到今

南宋の繁華、直に今に到る。

故人迎客高樓上

故人客を迎ふ、高樓の上、

情味每與酒味深

情味つねに酒味と深し。

最愛醉後彈綠綺

最も愛す、酔後、綠綺を弾じ、

十三徽外有心音

十三の徽外、心音あるを。

と詠みて水莖を揮ひて示し、さらばとて子の刻まへには宿に歸る。明日は北の都への遠き旅路なればとて、はやく臥しつれども、寝ぬにも寝ねられず、まじろみ醒めかへるうちに東のかたも白みて夜も明けぬ。